フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００５

Guardian Garden
PRODUCED BY RECRUIT

対談：三田村陽　×　鳥原学

●“朗らか”に広島を撮る

鳥原：三田村さんは京都生まれ京都育ちなんですね。写真はどちらで勉強したんですか？

三田村：大阪芸大へ行って、そのあと京都造形大大学院メディアアート学科で。今は京都でフリーでやってます。

鳥原：広島を撮られているんですが、タイトルを「対岸」とつけています。応募用紙によると、テーマというか、なぜ撮るか、という部分が迷われてるようですね。なにか答えは見つかりましたか？

三田村：“広島”って言った時に、必ず「なんで広島なの？」って聞かれます。そういう時、いつもうまく答えられなくて。それは先入観で、広島はきつい覚悟が必要だっていうのがあって。でも自分はしっかり対峙する感じでもないような……。最初から広島に写真を撮りに行こうと思って行ったんじゃなくて、何となく行った時から始まって、気がつけば月１回通ってて。そういう動機が曖昧なのもいけないのかなって思ったり……。

鳥原：それはどうしてですか？

三田村：明確に、広島のこういう部分を表現したいっていうんじゃなくて、何か自分の中での、悶えというか、うまく答えられない中で撮ってるのが……。

鳥原：……そうですか。一番最初に行かれたのはいつなんですか？

三田村：３、４年くらい前で、たまたま８月６日に。小学校の修学旅行以来初めてで、広島の街をゆっくり歩いてみて、なんか街の雰囲気がすごく好きなんですよね。水際があったり、山や公園があったりいろんな要素があって。かなり大きな街だけど、ちょっと入ったら昔っぽい界隈が残ってて。面白くてどんどん歩いて撮りたくなってきたんです。

鳥原：京都とはまた全然違うんでしょうね。広島は居心地のいい街だったんですか？

三田村：広島とは何の関係もないし、知ってる人がいる訳でもない。居心地は住んでる所が一番いいわけで。でも、何回も広島に行ってそこでスナップを撮る……、その行ったり来たりする中のずれみたいな、行き来するその動きを必要としてるっていうか……うまく言えない……。

鳥原：見えない主題に対して、自分がそこの周りをぐるぐる回ってしまうような感じでしょうか？

三田村：……だから見る人によっては物足りないというか、何か近づいていないっていうかもしれないですね。

鳥原：……と言って、近づきようがあるのかな。これまで広島を撮った写真家たちも、“広島の何を撮るか”っていうことについてはすごく悩まなくてはいけなかったと思う。広島ってものすごい絶対的なモニュメントで、例えばアウシュビッツと並ぶようなもの。結局その時代の人たちがそれに対したとき、主題はなんだろうって、まわりをぐるぐる歩いてしまう行為になっている。その積み重ねが、広島を被写体にしたときの写真のわりと本当の姿なんじゃないかなって思うんですよね。

三田村：そう言っていただけると、なんか励まされます……。

鳥原：ドキュメンタリーというのは、その人が実際にそこへ行って見た体験を根拠にするしかないんだと思います。だからわからないなりに、そこに根拠をおこうとしているのが、すごくいいなって素直に思った。僕も、一回だけ８月６日に行ったことがあるんです。子供の頃に『はだしのゲン』を見て物語がグサグサ刺さってきた時の感じと、現在の広島の新しくなってつるっとした街の感じが、なんとなく合わないんですよね。それに対して何を撮るんだって、思いますよね……。土田ヒロミさんの写真集とかご覧になったことありますか？

三田村：最初は土田さんの『ヒロシマ・モニュメント』にある場所とか、歩きながら無意識に探してしまったり。例えば橋の欄干とか、街の中にぽつんと残ってる所をたどって行くと、発見していく、体感してるっていう感じがある。それを全部収めていくっていうんじゃなくて、歩いていく中でふっと出会う感じかな。

鳥原：何を撮るのかっていうのは、例えば、原爆ドームとかあまり写ってないような……あ、でもちらっと写ってますね。

三田村：初めは、ぱっと見て広島って分からない方がいいと思ってたんです。で、ちょっと意識的に原爆ドームとかを、フレームから外すように撮ってた。でも、やっぱりスナップの場合、瞬間的に入ってくるときがある。それでだんだん、それは現実に広島にあるんだからあえて外す根拠もないなって思えてきた。

鳥原：写って当たり前だろうってことですね。

三田村：そうなんです。そのこだわりは自分の中の何だったのかなって。さっきの先入観みたいな、原爆ドームが写ってたらカタカナの“ヒロシマ”的なものを見る人にイメージさせてしまうからって思ってた。

鳥原：カタカナの“ヒロシマ”ですか。固有名詞を超えた特定のイメージが出来上がってますもんね。

三田村：だから広島で“普通の街のスナップ”を撮ることが、悪い事なんじゃないかって。なんら自分の中では違和感がなくても、“広島”って言葉にした時の、みなさんの反応を知って、改めて重みを感じたんです。

鳥原：みんなどんな反応をしますか？

三田村：「なんでそこまで広島にこだわるの？」、「困った事言い出したな」みたいな感じで黙ってしまったり。……僕自身はわりと朗らかに広島の街をスナップしてるんです。シリアスな顔じゃなくて。でも、どこか「すごく撮るの楽しいんだけど」って言いづらい……。撮ったものを自分でもう一回見ると、やっぱり楽しいって思う。撮った以上の何かが写ってくれればいいなぁって。

鳥原：朗らかであり続けることが、ちゃんと出来てるのが面白いなと思うんですよ。

三田村：朗らかって能天気に聞こえるかもしれませんけど、……日常の個人的な悩みや抱えるものを振り切るような白さ、それは空虚な感じじゃなくて、すごく充実した気分の白さ。それがスナップを続けてる支え、自分の喜びっていうか……自分なんてないと言いつつも実はその気分を知ってて。反動というか自分の濁りみたいなものからちょっと遠ざかりたいとか、そういう感じもなきにしもあらずで。

鳥原：カタルシスみたいな。

三田村：だからそれを言ってしまうと、広島に対して失礼っていうか、不謹慎な感じがするし……。どうしても広島っていうのは僕の中で強烈な重みがあって、そことのぎりぎりの所で朗らかにやってるつもりなんです。

●世代からくる距離感

事務局：広島の体験は、我々のおじいちゃんの世代は自分が戦争に行っていたり、親の世代は子供の頃に戦争体験が実際にあって、我々の世代は『はだしのゲン』。三田村さんはさらにひとまわり下。この世代の広島に対する距離感が、この作品にはあるといえませんかね。

鳥原：そうですね。彼らにとっては体験ではなくて歴史。教科書で学ぶとか、メディアを通じてしか知れなかった。僕らは戦後２０年後ぐらいに生まれてる。そうすると近所のおじさんが戦争に行った話とか聞いたこともあったんだけども、三田村さんは？

三田村：実際にはほとんど聞いたことないですね。

鳥原：それが良い悪いではなくて、それだけ時間がたってしまっているということですよね。

三田村：歴史の教科書的な知識とかと少し違ったところで、広島と行き来する運動の中での出会いのようなものはある。例えば、現代史の本の中でたまたま原民喜の小説を見つけて、彼の生涯に興味が湧いてきて、生まれた場所とか、当日どういう動きをしたか、その道を実際にたどってみたり。そのナイーブなところに共感して、自分の中で積み重なっていく部分もあって。それが戦争を知ることとどう関わるかは分からないし、実際の写真の表面上には写らないかもしれないけど、その足取りみたいなものは、自分の中では大切な要素なんですよね。

鳥原：そういう知識や体験が総体として写真に出るでしょうね。

事務局：選考会の時に、どうしてもこれまでのヒロシマをテーマにした作品と比較して、三田村さんのは「これは本当に広島だよね？」とか、「ちょっと弱いんじゃないか」とか、そんな話も出てましたが。

三田村：そうですね、ひ弱な感じ……。特にこれ、あくびの写真ですが。……倦怠感みたいなもの、ため息であったりつぶやきであったり、まさに沈黙であったり、自分ではどうしてもそういう瞬間に目がいってしまって。感情的な振れみたいなのがふっと静まった時みたいな、そういう風景、人物に目がいってしまうんですよね。

鳥原：三田村さんの世代で、例えば最近の『ひとつぼ展』とかいろいろ見てると、緩さというか倦怠みたいなものを感じます。２～３０年前までは、同じように主題の周りをぐるぐる回ってるとしても、おそらくは嘘でも主題を作ってしまう必要が強かったのではないですかね。

●ニュアンスとドキュメンタリー

鳥原：撮り方はコンセプトがあるようですが、６×４.５を縦位置で撮ることに関してこだわる理由はあるんですか？

三田村：まず買ったカメラのフレームが縦位置で、それで広角レンズにして試し撮りしたら、とても撮りにくかった。横位置で広角だったら絵になるものでも、全然自分の距離感をどこ持っていったらいいのかわからなくなって。でも、人物を撮る時には人間の形に添ってるって感じがして……とか考えてる時に、ある本にあった言葉を偶然読んで、天と地の関係を意識し出したんです。歩いてて視線を、もちろん横にも動かすけど、上下に動かすっていうのがちょっと発見で、それでこのフォーマットで広島の距離感みたいなものを撮ろうと。

鳥原：本の言葉っていうのはどういう言葉だったんですか？

三田村：広島の街はもともとの地面から３０センチ高いそうで、それは、瓦礫や埋もれた人の骨を、撤去するより埋めた方が簡単だったからっていう話。その話自体は本当かどうかわからないんですけど、それを読んだ時に、なんだか普通に歩いていてもちょっとガツガツ歩けないというか。思い込みにすぎないかもしれないけれども、そういう風な自分の足取りみたいなものと、縦位置っていうのがぴったり寄り添うようになってきて。

鳥原：歴史が文字通り堆積してる所を撮るんだ。縦位置で。

三田村：って言えば大げさなんですけど。そんなものは写らないと思うんですよ……、ただ自分の意識としてはそういうことが頭にあるだけで、撮る時のスタンスがちょっと違うような気がします。

鳥原：三田村さんの写真は眼に見えている被写体の強さではなく、そういうニュアンスの積み重ねなんですよね。ニュアンスを撮ろうとするから、弱いと言われたら、そうなのかもしれない。形あるものだったらしっかりしたモニュメントを撮ったらいいし。ただ、何故ニュアンスに惹かれていくんでしょうか？　表現には主題とそのニュアンスみたいなのがあると思いますが、主題は不明確だけど、撮りたいニュアンスははっきりしてるのが三田村さんの写真だろうと思うんですが。

三田村：主題とニュアンスか……。両方ぼやっとしてる……。自分の中でドキュメントっていうのはすごく重くて手ごたえがあるもの。自分の撮った広島をドキュメンタリーとして出すのは、葛藤があったんです。こうやって対談とか、人にいろんな感想をいただくとか、そういうのが必要なんだって分かっているんです。でも、どう思って欲しいかよりも、こういうニュアンスでしかない写真だけど、自分でもドキュメントってどこかで言ってみたいところがある。

鳥原：言ってみたい？　言ってもいいんじゃないですか。

三田村：“ドキュメントです”って言えないんですよね。それは弱さとか、足りなさがあって……。写真だけじゃなくて、自分自身の何か決定的な欠如した部分とか、どうしても、そういうものと一緒に行くしかなくて。応募する時に、ドキュメンタリーの公募展だからニュアンスだけを強調すればダメだとも思っていて、その足りなさを広島に託してる部分も否めないというか……。僕にとって広島は、無根拠だけど、とりあえずそこへ行ってみれば、何か反応することができるんじゃないかなって思うんです。

●８時１５分にどこにいるか

事務局：過去には、例えば土門拳さん、土田ヒロミさん、長崎だったら東松照明さんって、それこそドキュメンタリーの王道として取り上げられる人たちがいます。若い人たちは、自分もストレートに真っ直ぐ大きなテーマにぶつかっていくんだって思わないんでしょうか？

鳥原：それは無理なんだと思います。その当時の時代背景があったわけで、日本人とはなんですかっていう問いに対して、はっきりさせなきゃいけなかった時代であったと思う。今はそういう風に求められない。広島の問題はもはや誰も言わなくて、ある意味ではもう強力な神話になってる。その神話に取り込まれないようにリアルを見ようとするとこうなった。ドキュメンタリーって、写し方や撮り方とか表現方法も含めてドキュメンタリー。その時代精神がそこに込められてるもの。だから、今をリアルに撮ろうと言うんだったらドキュメンタリーとして成り立つ訳ですよね。今さら土門さんみたいなことをやった所で何か嘘っぽくなってしまう。

三田村：神話というか、何で“広島”っていう言葉に、恐れおののいているかといえば、そういう側面もあると思う。当然不可能だっていう前提でどういうふうに始めるかって。だから結果的にぼやっとしてるのかもしれない。極端に言えば表現じゃない。表現じゃないけど、じゃあドキュメントって何かって言うと、シンプルになっていきますよね。そこを歩く、見ていく、たどっていくって……。でも、それが果たして求められているドキュメントかといえばまた違うと思うんですよね……。

鳥原：世間や社会が求めてるものではなくて、それはおかしいんじゃないっていうのがドキュメンタリーの仕事。神話に対して朗らかに歩くという手段で抵抗してる。だったら、それはそれでドキュメンタリーなんだと思います。

三田村：そうかもしれない……。

鳥原：ある意味広島も長崎も分かりやすい。でも、本当にそんなに分かりやすいものなのかなって思いますよね。

三田村：現実的なことを言えば、８月６日の平和公園はカメラを持った人がいっぱいいる。最初はそういう人たちと一緒にいることに違和感がなかったけど、徐々に違う感じがしてきて。８時１５分の黙祷の瞬間に自分がどこにいるかって、毎年迷うんですよね。最初は何の疑問もなく平和公園にいたけど、でも、普通の街中、普通のバス停や商店、そういう所に身を置いた時に、反応は一様じゃない。もちろん普通に日常が流れてて時間が止まらなく進んでいて、そんな中でひっそりと黙祷してる人がいたり。そういう中に自分の体を置いてみて良かったなって。特別な時間であっても普通の所に身を置いてみるっていうか。

鳥原：今日は昨日の続きで、昨日は一昨日の続き……そういう連続した時間の流れがある。でもある一点の特異点を設定する事でみそぎにしてしまうことってありますね。広島の神話ってつまり、この日に慰霊祭やっておけばみそぎになるってことでもあります。でも実際は、昨日から今日へずっと続いてく時間の一断面だということ。

●３枚の“ヒロシマ”的な写真

事務局：作品の中に、少ないけどカタカナの “ヒロシマ”的な写真がぽつぽつと入っていますが、それはどういう意図で？　ぼけていて細部はわからないんですが。

三田村：おぼろげに当時の風景写真かなっていうのはわかると思いますが、全作品６０枚のうち、３枚入れたんです。広島の街に、当時を説明する金属のプレートが所々に立ってるんです。当時の写真が転写されてて。歩いていくと西日で光って、最初はなんだろうって顔を近づけてみて。それを写真に焼くかどうかは考えずに、そこを通過する時にそのプレートをしっかり撮っていくっていうのを、自分の歩き方にしていったんです。まさに不可能っていうか、隔たってる、僕自身が“対岸”にいる、「顔を近づけても見えないもん」って、そういう記号、まさにニュアンスを思い切って入れてみたんです。映画の影響もあって、コラージュというか、流れの中に突然インサートでパッて入って消えてくってことに興味があって。

事務局：かなり意識的にそういう“ヒロシマ”的なものを入れたい、入れなきゃってことなんですね。

三田村：それもまたもやもやしていて、結局これは広島だっていうことも分からないかもしれない、それに別に被爆当時の事を言いたい訳じゃない。ただ、当時の広島を見ることの距離感が自分では制御できないっていうか……。

鳥原：……必要だってことですね。

三田村：自分では入れたいなって思って。やっぱり“ヒロシマ”から否応なく自分も影響受けてるし、どうしてもなかったことには出来ない。無視する訳にいかないから、その辺の葛藤をどういう風に写真上で表せるかと……。

鳥原：それ聞いてたらこの作品は、結構隠し味がいっぱいあるんですね。縦位置にすることもそうだし。

三田村：隠し味……というか無味。味がないっていうか……。

鳥原：いや、極めてコンセプチュアルなものになってますよ。……戦後６０年ですけど、戦争についてはどうですか？

三田村：知識として教えられてきた戦争の情報や記録に対しての自分の感覚は、肉体的なものじゃないんですよね。ＮＨＫで『あの日』っていうシリーズ、終戦の日の思い出を語る番組があって、いろんな人が喋ってるんですが、やっぱり肉声に触れると、そこから何か自分がたぐり寄せたいような気持ちになる。人の声や喋ってる顔つき、そういうものから入ってきたものは、忘れられないものになってる。それと写真を撮ることがどう関係するのかは分からないけど。

鳥原：写真に関係なく、どういう風に今の若い人が戦争を受け止めてるんだろうって。歴史の共有みたいなことってやっぱり必要な時代。これはひとつの三田村さんの歴史の共有の仕方だと思う。遠く隔たってるものだけど、やはり連続した時間のなかでは無縁ではない。そこをどういうふうに考えるのか……。今日お話を伺ってみて、すごく難しそうな話だけど、やってみないと分からないってことですね。現場に行かないといけないですね。

三田村：分からないなりに動いていくと、徐々に何か見えてくる。っていうと大げさだけど、撮るものがぼんやりとでも、なんか形に、道になっていく……。とりあえず、行ってみようって思います。

２００５年５月３１日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）